1.2　気象、海象等

瀬戸内海地域は、気候学的には瀬戸内気候区という名で呼ばれており、平均気温約 16℃、年間平均降水量約 1,000～1,600 ㎜であり、比較的温暖少雨の地域である。瀬戸内海を囲む山間地帯は、年間平均降水量約 2,000～3,000 ㎜の多雨地帯である。瀬戸内海地域における年間降水量の分布を図 1－4 に示す。

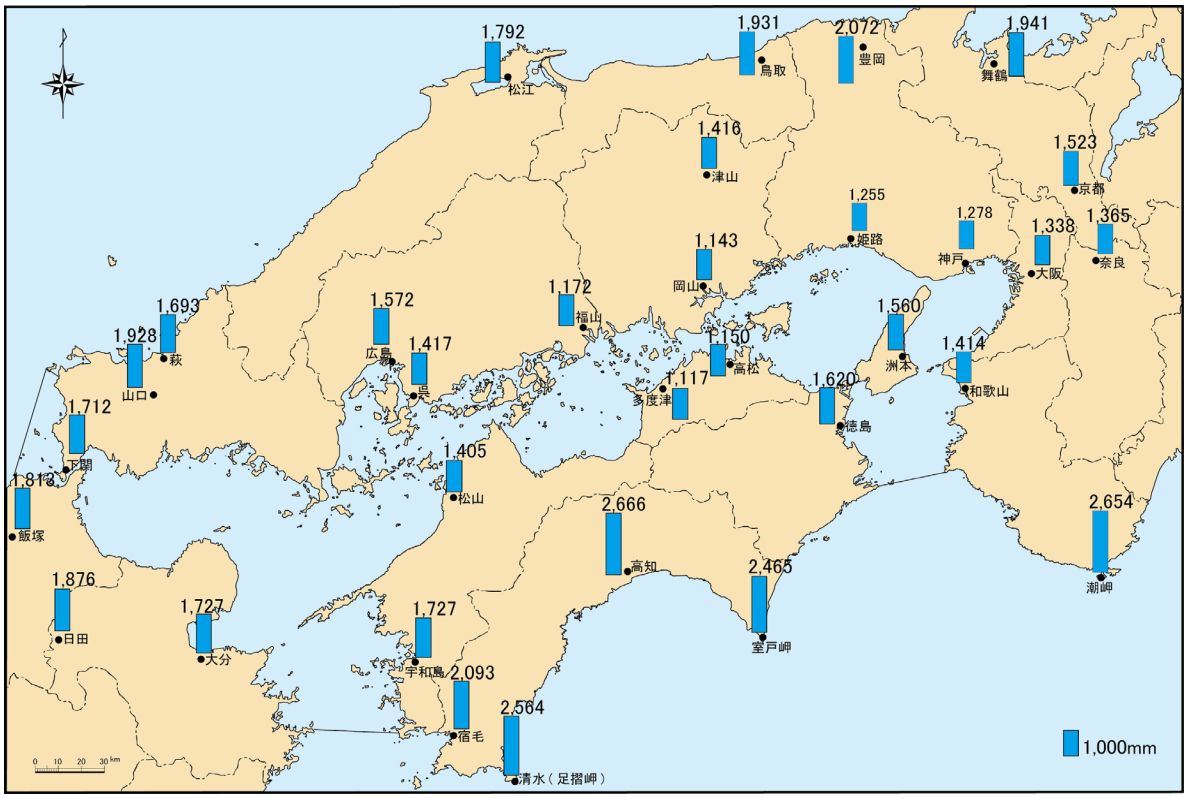
瀬戸内海の気象の特徴として、規則正しい海陸風の存在がある。１年を通じて見ると、風向きは沿岸部では海岸に直角な方向のものが多い。陸上の風はその地形に大きく左右されている。海象は気象の影響を蒙ることが多い。

瀬戸内海に流入する 665 水系の河川からの流入水量は、年間約 500 億m^3にも達している（表 1－4、1－5）。

瀬戸内海には多くの湾、灘があり、湾・灘の大部分は水深が 60m以浅であり、海峡部を除く海域で水深 60mを上回るのは、伊予灘、豊後水道、紀伊水道のみである。瀬戸内海の水深図を図 1－5 に示す。

瀬戸内海の海象は、内海としての独自の特徴をもっている。半閉鎖的水域で、浅海域が多いため、大洋の持つ恒常性がやや弱く、気象や河川流入の影響を受けやすい。このため季節による水温変化も大きく、降雨による塩分の変化や赤潮なども発生しやすい。

瀬戸内海の海水は、太平洋等の外海とは紀伊水道、豊後水道及び関門海峡を経て交換されている。また、瀬戸内海は潮汐の差が比較的大きく、東部海域で１～３m、西部海域では３～４mに及ぶ。この潮汐差と幅の狭い海峡が多いため、潮の干満に応じて数ノットの潮流を生じ、渦潮が見られるほど潮流の速い海峡が各所に点在する。鳴門、速吸瀬戸などの狭水道では、５～10 ノットにも及び、地形の複雑さも加えて独特の海象を呈している。



出典：気象庁資料より作成

図 1－4　瀬戸内海の年間降水量(1991～2020)の分布